OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	花蕊夫人「宮詞」に於ける宮女の表象について
Author(s)	ホッブス, ガイ
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2026, 59, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104559
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

花蕊夫人「宮詞」に於ける宮女の表象について

ガイ・ホッブス

キーワード：宮詞／宮女／花／馬／天子

はじめに

宮廷生活等を詠ずる「宮詞」は、中唐の王建（?-830?）「宮詞」百首に始まり、五代蜀（907-965）の花蕊夫人（生没不詳[1)]）などの作がそれに続いた。花蕊夫人「宮詞」については、北宋の陳師道（1053-1101）が「王建に効(なら)いて宮詞百首を作る」（「花蕊夫人効王建作宮詞百首」[2)]と述べたように、王建「宮詞」を継承したとされてきた。では、花蕊夫人「宮詞」には独自性は見られないのだろうか。本稿では、宮中奥深くに暮らし、帝王に侍る宮廷女性（宮女など）を取り上げて、王建「宮詞」と花蕊夫人「宮詞」の比較および「花」・「馬」・「天子」のモティーフを通じて、宮廷女性の表象と王建・花蕊夫人「宮詞」の差異を明らかにしたい。尚、王建「宮詞」、花蕊夫人「宮詞」、いずれにも詩題はない為、各詞を特定する為に番号を付した。番号はそれぞれの宮詞底本の配列の順番に従う[3)]。

一、「花」モティーフ

宮廷環境は大きく自然界と人間の世界に分けられる。自然界に於いては、生物は植物と動物に大別でき、それぞれの代表的なものの一つは花と馬といえる。その意味では、花蕊夫人「宮詞」を考察する際に最初に取り上げるモティーフとして「花」と「馬」は相応しい。先ずもっとも身近なモティーフ

であるといえる宮廷女性と花を考察する。「宮詞」においては、花と結びつける形で宮廷女性の姿や振る舞いが描写されているが、王建と花蕊夫人が描く女性像は異なる。最初に、王建宮詞二首を考察する。女性の多い後宮において、彼女達の心のありように光を当てる作品である。

王建宮詞（38）

欲迎天子看花去	天子の花を看に去くを迎えんと欲し
下得金堦却悔行	金階を下り得たるも　却って行くを悔やむ
恐見失恩人舊院	恐るらくは　恩を失せし人の旧院を見れば
回來憶着五絃聲	回り来りて五絃の声に憶い着らん

第一句では、宮廷女性が花見に参加して天子に注目されようとする。「天子」は皇帝。沈佺期「塞北、二首之一」に「歸來拜天子」（帰來して　天子に拝す）『全唐詩』（巻九七）とある。第二句では、金をちりばめたきざはしを下りる時、女性は花見に行くことを後悔する。第三句では、その悔やみの理由が明らかになる。花見の途中で、宮女が以前の寵愛者（彼女自身）の家を見て過去の寵愛生活を思い出すかもしれないと心配するから。第四句では、宮女が以前の寵愛者（彼女自身）が奏でた五絃の声を思い出すことが懸念の種であると述べられる。

王建宮詞（38）では、花見の場面と結びつけながら、女性同士の寵愛競争をめぐっての思いを述べた作といえる。第三句の「失恩人」が寵愛状態のはかなさを、同句の「恐」がそれに対する女性の精神的な不安をはっきりと表現している。

次の王建宮詞（79）は、落ちている花びらと錆びてしまった扉の鎖の表象を通じて、宮女の心理的な状況を描写する。

王建宮詞（79）

春風院院落花堆	春風　院院　落花堆く

金鎖生衣掣不開　　金鎖　衣を生じて　掣くも開かず
更築歌臺起粧殿　　更に歌台を築きて　粧殿を起こす
明朝先進畫圖來　　明朝　先ず画図を進め來る

第一句では、花々が散り落ちた建物の庭には誰も訪れる人がいないことをうたう。人気無い庭に幾重にも積み重なる落花は、過ぎ去った春を示唆する。同時に、それは人生の盛りを過ぎて顧みられなくなった哀れな宮廷女性を示唆する表象であるかのようだ。「院院」はそれぞれの宮室。王涯「宮詞、三十首之四」に「院院青娥侍至尊」（院院の青娥　至尊に侍る）『全唐詩』（巻三四六）とある。第二句では、錆ついて開けられない精緻かつ貴重な鎖が描写されている。まるで、宮廷女性の閉ざされた世界を象徴しているようだ。「生衣」は錆。鮑溶「期盡」に「魚鎖生衣門不開」（魚鎖衣を生じ門開かず）『全唐詩』（巻四八六）とある。第三句では、新しい歌舞上演の為の楼台を造ったり、妃嬪の居住を建てたりする。「更築歌臺」は寵愛対象の交代を暗示しているようだ。第四句では、明日の早朝にその建築物の為の設計図が進呈されることが述べられている。

王建宮詞（38・79）には、女性の不安な心理と哀れな状態が表現されており、王建宮詞（38）の「失恩人」と王建宮詞（79）の「更築」が寵愛交代の激しさを表す。しかし、次に見る花蕊夫人宮詞（26・27）に於ける蓮の花との振る舞いの描写は、王建宮詞の女性表象とは対照的な明るい様相を感じさせる。

花蕊夫人宮詞（26）

内人追逐採蓮時　　内人　追逐す　採蓮の時
驚起沙鷗両岸飛　　驚き起つ沙鴎　両岸より飛ぶ
蘭槳把來齊拍水　　蘭槳を把り来りて　斉く水を拍ち
並船相鬬濕羅衣　　船を並べて相い闘わすれば羅衣を湿す

第一句では、競い合って蓮を採る宮女たちの遊び心が描写され、蓮を集めることを楽しんでいる。「内人」は宮中に仕える官属。宮人。張祜「正月十五夜燈」に「三百内人連袖舞」（三百内人 袖を連ねて舞う）『全唐詩』（巻五一一）とある。第二句では、内人達の活発的な動きに驚いて飛び立ってしまう砂浜にいるカモメが描かれる。第三句では、内人達は木蘭で造った船の櫂で一斉に水を打つ。原文の「槳」はかじ・かいの意。第四句では、船を並べて相打ちすることによって薄絹の衣服が濡れる。

花蕊夫人宮詞（26）では、「追逐」と「拍水」が宮女の活発さと遊びの喜びを表している。また、第二句の飛び立ってしまうカモメの驚きは、宮女の動きの激しさを反映して、第四句の相打ちによって濡れる薄絹の衣服は、宮女達の開放的かつ自由な心持ちを示すかのようだ。この解放感は王建宮詞（79）の「不開」と王建宮詞（38）の「悔行」と対照的である。

この花蕊夫人宮詞（26）と同じく、次の花蕊夫人宮詞（27）は宮女と蓮の花との明るく楽しげな関係を描く。

花蕊夫人宮詞（27）

新秋女伴各相逢　　新秋（しんしゅう） 女伴（じょはん） 各（おのおの） 相い逢（あ）う
罨畫船飛別浦中　　罨画（えんが）の船（ふね）は飛（と）ぶ　別浦（べつぽ）の中（うち）
旋折荷花伴歌舞　　旋（ただ）ちに荷花（かか）を折（お）りて　歌舞に伴（ともな）わしむ
夕陽斜照滿衣紅　　夕陽（せきよう） 斜（なな）めに照（て）らし　衣（ころも）に満（み）ちて紅（くれない）なり

第一句では、秋の初めに女のともがらが共に逢うことが描写されている。第二句では、彩色した絵のある船が速く通り過ぎて水ぎわに行く。第三句では、帰って来る時、折った蓮の花を持ちながら歌ったり踊ったりすることが描かれている。第四句では、夕日に赤く染まる衣服が描写されている。

花蕊夫人「宮詞」（26・27）にうたわれる花には、若々しく活き活きとした宮女のイメージがあるようだ。王建宮詞（38）の寂しそうな一人の宮女の悔やみと悩みの描写と対照的に、花蕊夫人宮詞（27）は複数の宮女の「相

逢」による喜びの共有を強調する。上記の明るいイメージの他、花蕊夫人「宮詞」（26）の結句末の「羅衣」と（27）の結句末の「衣紅」が優雅で鮮やかな衣服イメージを通じて女性の華やかさを伝える。

以上のように、花蕊夫人宮詞（26・27）は蓮の花に係る宮女の活発さと遊び心を描写するが、次の花蕊夫人宮詞（28）は花と関わりのある一層変わった宮女の遊び心を表現する。第一句の「少年」と第四句の「纖手」がそれぞれ異なるイメージを与えて、読者の詩における主役に対する期待を覆す。

花蕊夫人宮詞（28）

少年相逐採蓮回	少年（しょうねん）　相（あい）い逐（お）い　採蓮（さいれん）して回（かえ）る
羅帽羅衫巧製裁	羅帽（らぼう）　羅衫（らせん）　巧（たく）みに製裁（せいさい）す
毎到岸頭齊怕水	岸頭（がんとう）に到（いた）る毎（ごと）に　斉（ひと）しく水（みず）を怕（おそ）れ
竟提纖手出船來	竟（つい）に纖手（せんしゅ）を提（てい）して　船（ふね）より出（い）で来（きた）る

第一句では、「少年」は互いに追いかけながら蓮を摘み採って帰ることが描写されている。「少年」は年の若いもの。わかもの。王績「薛記室收過莊見尋率題古意以贈」に「憶我少年時」（我憶う 少年の時）『全唐詩』（巻三七）とある。第二句では、被っている薄絹の帽子と着ている薄絹のシャツは上手に仕立てられていることが述べられている。第三句では、岸辺に近寄るたびに一斉に水を恐れることが述べられている。第四では、ついに、細く柔らかな手を伸ばして船から上がって来ることが描かれている。「纖手」は細く柔らかな手。美人の手。李白「古風、五十九首之二十七」に「纖手怨玉琴」（纖手 玉琴を怨む）『全唐詩』（巻一六一）とある。

花蕊夫人「宮詞」（26・27）は蓮の花に係る宮女の遊び心を描くが、花蕊夫人宮詞（28）は一層工夫された遊びを披露する。前半二句には、「少年」の遊びの演出に必要な「衣裳」（羅帽・羅衫）が紹介されるが、後半にはその「少年」の実像が明らかになる。第二句の「巧製裁」がその「少年」の姿を作り上げる為の工夫と遊び心を示し、第三句の「怕水」と第四句の「纖

手」がそれぞれ女性の心理と姿を現す。男装して楽しむ宮女の描写である。起句の「少年」の真相が結句の「繊手」でやっと明らかになり、花蕊夫人の修辞的な仕掛けの構築であるといえる。

二、「馬」モティーフ

自然界の植物を代表する花のモティーフの次に、自然界の動物を代表する馬のモティーフをとりあげる。宮詞の中では、王建と花蕊夫人が乗馬する女性を描写したが、表現する女性像には根本的な相違点がある。最初に、王建宮詞（22・33）を考察する。

王建宮詞（22）

射生宮女宿紅粧	射生の宮女　紅粧を宿め
請得新弓各自張	新弓を請い得て　各　自ら張る
臨上馬時齊賜酒	上馬の時に臨み　斉しく酒を賜る
男兒跪拜謝君王	男児　跪拝して　君王に謝す

第一句では、狩りに出る宮女は昨晩の化粧のままで出かける。第二句では、宮女達は頂いた新しい弓の絃を張る。第三句では、馬に乗ろうとする時、皆が酒を賜る。第四句では、宮女達は男子のように跪拝して天子に感謝する。

本宮詞には、宮女自ら狩猟したり、弓の絃を張ったり、男の様に跪拝したりする様子が描写されている。このような振る舞いを示す史料もある。例えば、孟元老撰『東京夢華録』に「だいたい、宮中において、男子の服を着る者は、男子の礼に従って生活する」（「大抵禁庭如男子装者、便随男子礼起居」）[4] とある。宮詞（22）では、「射生」・「弓各自張」・「上馬」・「跪拝」が男性的なイメージの動作を現す。次の王建宮詞（33）は、寒さへの対応と乗馬の様子を見て欲しい気持ちの描写で女性像を示唆する。

王建宮詞（33）

春風吹雨洒旗竿　春風は雨を吹き　旗竿に灑ぐ
得出深宮不怕寒　深宮より出るを得れば　寒きを怕れず
誇道自家能走馬　誇りて道う　自家　能く馬を走らすと
圍中横過覓人看　圍中を横過し　人の看るを覓む

第一句では、春風に吹かれている雨が旗ざおを濡らす。第二句では、奥深い宮殿から出てくる宮女は寒さを気にしない。第三句では、自分は上手に乗馬できることを誇らしげに言う。第四句では、宮女は周りを横切って、人の注目を得ようとする。「覓」は求めること。楊師道「采蓮」に「采蓮江浦覓同心」（采蓮 江浦 同心を覓む）『全唐詩』（逸巻上）とある。

王建宮詞（33）では、乗馬している人の性別に関する直接的な描写はないが、宮詞の性格からみて、女性である可能性が高いと思われる。第二句の「得出深宮」から、宮殿から出る機会をたまにしか得られないのは男性よりも女性であろうと推測できる。また、第三・四句については、通常は女性の乗馬は男性より少なかったと考えられるので、女性が乗馬すると、その馬術を見せたい気持ち（「覓人看」）も強いであろうと推察できる。

一般的に女性は馬に乗らないにもかかわらず、王建は男性のように馬に乗る女性をうたった。男性的な女性像と言える。その男性的な表象を強調するのは、第二句に於ける奥深い宮殿から出てくる宮女の寒さを気にしない態度である。一方、次に見るように、花蕊夫人宮詞（24・23）は馬に乗る女性の女性らしさ（かわいらしさ）をうたった。

花蕊夫人宮詞（24）

自教宮娥學打毬　自ら宮娥をして　打毬を学ばしむ
玉鞍初跨柳腰柔　玉鞍に初めて跨りて　柳腰柔かなり
上朋知是官家認　上棚知る是れ　官家の認むるを
遍遍長贏第一籌　遍遍　長に贏つ　第一籌

第一句では、皇帝は自身でポロの遊びを宮女達に教える。「宮娥」は宮中に仕える美人。宮女。韋荘「和鄭拾遺秋日感事一百韻」に「宮娥改舊妝」（宮娥 旧粧を改む）『全唐詩』（巻六九七）とある。第二句では、宮女が美しい鞍に乗り上がる時の腰のしなやかさが描写される。「柳腰」はしなやかな腰。やなぎごし。女性的な美しい容姿を示す。韓偓「頻訪盧秀才」に「柳腰蓮臉本忘情」（柳腰 蓮臉 本より情を忘る）『全唐詩』（巻六八二）とある。

第三句では、一方のポロ・チームが知っていることは、天子が認めるものが居ることであると述べられている。原詩の「朋」を「棚」として解釈し、「上棚」は一方のチームとする。諸説がある（「打毬試合を司る内侍」[5]、「毬隊に与える休憩所」[6]、「毬隊が毬場に入場すること」[7]、「毬隊の一方のチーム」[8]）なか、「毬隊の一方のチーム」が文脈により合うのでその解釈を採用した。「官家」は天子。張籍「烏夜啼引」に「知是官家有赦書」（知る是れ官家に赦書有り）『全唐詩』（巻三八二）とある。

第四句では、第三句で天子が認めるものは、いつも第一得点を取ることが述べられている。花蕊夫人宮詞（24）の前半では、天子による宮女へのポロ遊びの指導と宮女の腰のしなやかさが描写されて、後半では、ポロ場に於ける天子の特権の行使が描かれている。

花蕊夫人宮詞（24）に続き、花蕊夫人宮詞（23）では、見た目と馬に乗る時の心理の描写が宮廷女性の女性らしさの表象を一層深める。

花蕊夫人宮詞（23）

殿前宮女總纖腰	殿前(でんぜん)の宮女(きゅうじょ) 総(す)べて纖腰(せんよう)
初學乘騎怯又嬌	初(はじ)めて乗騎(じょうき)を学(まな)び 怯(おび)えて又嬌(またなまめか)し
上得馬來纔欲走	馬(うま)に上(のぼ)り得(え)て来(きた)りて纔(わず)かに走(はし)らんと欲(ほっ)すれば
幾回拋鞚把鞍橋	幾回(いくかい)か 鞚(たずな)を抛(なげ)すてて鞍橋(あんきょう)を把(と)る

第一句では、宮殿前の宮女の細くてしなやかな腰が描かれる。「纖腰」はほそやかな腰。美人の腰。劉禹錫「觀柘枝舞、二首之一」に「垂帶覆纖腰」

（垂帯 繊腰を覆う）『全唐詩』（巻三五四）とある。第二句では、乗馬の初体験に伴う怯えとかわいらしさの両面の様子が描かれている。第三句では、やっと馬に乗って走ろうとする瞬間が描写されている。第四句では、怖くなった宮女は手綱を棄てて鞍ぼねを必死に握ることが描写されている。

花蕊夫人宮詞（23）では、乗馬活動に於ける宮女の繊細な容姿と心理が描かれている。花蕊夫人が選ぶ言葉（「繊腰」・「怯」・「嬌」）が女性らしさをよく現す。また、結句では、手綱を投げすてる（抛轡）ことや、通常握らないであろう「くらぼね」を握ることは、女性的な振る舞いの表象を強調する。花蕊夫人宮詞（23）は第一句の「繊腰」を起点に、「又嬌」・「欲走」・「把鞍橋」の順で、宮女の乗馬の劇的な展開を描写する。

三、「天子」モティーフ

三・一、「天子と宮女」

自然界を代表する「花」・「馬」モティーフに於ける宮女の表象の次に、宮廷のもっとも中心的な存在で、人間世界の頂点に立つ「天子」のモティーフに於ける宮女の有り様を考察する。「天子」モティーフは「天子と宮女」・「天子の異称」・「天子の行動」に分けて考察を行う。最初に「天子と宮女」を取り上げる。

「宮詞」は内朝（後宮）に関する事を描写し、後宮は宮殿の内側の私的な空間で、天子を中心とする世界であるので、宮廷女性との係わりは重要である。宮詞では、王建と花蕊夫人が宮廷女性の天子との係わりを描写したが、表現する女性の天子に対する態度には相違点がある。先ず、王建宮詞（53）と花蕊夫人宮詞（16）を考察する。ともに女性が文章を書き記すことが詠われているが、異なる視点が見られる。

王建宮詞（53）

私縫黄帔捨釵梳　　私(ひそ)かに黄帔(こうひ)を縫(ぬ)い　釵梳(さいそ)を捨(す)て

欲得金僊觀内居　　金仙觀内の居を得んと欲す
近被君王知識字　　近　君王に字を識るを知られ
收來案上檢文書　　収め来りて案上に文書を検せしむ

第一句では、（女道士になろうとする宮廷女性は）黄色い肩掛けを密かに縫って、これからもう使うことのない釵と梳を捨てると述べられている。「釵」はかんざし。孟浩然「初春漢中漾舟」に「波影搖妓釵」（波影妓釵を搖らす）『全唐詩』（巻一五九）とある。「梳」はくし。王建「送韋處士老舅」に「照水學梳頭」（水に照して梳頭を学ぶ）『全唐詩』（巻二九七）とある。第二句では、その宮女は金仙観という道観の中の住まいを得ようとする。第三句では、最近、その宮女は文字が読めることが君王に知られたことが述べられている。第四句では、それゆえに、宮女は呼び戻されて、机上の文書を整理する業務が与えられる。

本宮詞では、華やかな装身具である簪と梳を捨ててしまうことが宮廷女性の現世への諦めの気持ちの現れであるようだ。しかし、その悲しい雰囲気の中で、後半の文書整理業務の提供が天子の宮廷女性への哀れみを示すかのようだ。次の花蕊夫人宮詞（16）では、才能のある女官が積極的に天子の池での散歩に付き添って、天子の詩作行為を助ける。

花蕊夫人宮詞（16）

才人出入毎參隨　　才人　出入すれば毎に参随す
筆硯將行繞曲池　　筆硯　将ちて行き　曲池を繞ぐる
能向彩牋書大字　　能く　彩牋に向いて大字を書き
忽防御製寫新詩　　忽ち御製の新詩を写すに防う

第一句では、才能のある女官（才人）が天子の外出にお伴することが述べられている。「才人」は才能のある女官。宮中の女官名。『隋書』（巻十一）に「美人、才人、良人三職」とある。第二句では、筆と硯を携帯しながら彎

曲した池を（天子のお伴をして）歩き回る才人が描かれている。第三句では、才人は彩りを施した詩箋に立派な字を書けることが述べられている。第四句では、才人は天子の新しい詩を書き写す突然の依頼に備えることが述べられている。

第一句の「才」と第三句の「能」がこの宮女の能力を示し、結句の「防」は天子の為に積極的に「準備」をしていることを現す。王建宮詞（53）の女性は必ずしも自分から進んで文章を書こうとはしていない。天子の命令を受けて、書かざるを得ない状態に置かれているかのようで、王建宮詞（53）結句の「收来」が天子に呼び戻されたことを強調する。

ところが、花蕊夫人宮詞（16）の女性は自ら進んで、能動的、自発的に文才を発揮しようとしている。また、王建宮詞（53）に表現されている女性が一人で携わっているであろう「検文書」に対して、花蕊夫人宮詞（16）の「毎参随」は天子と共に頻繁に活動することを示唆する。また、文書と携わる媒体の違い（王建宮詞（53）の「案上」に対して、花蕊夫人宮詞（16）の「彩牋」）が一層の華やかさを与える。この異なる場面設定は王建と花蕊夫人の宮廷女性表象の雰囲気を大きく左右する。

上述した宮詞（53・16）には、具体的な能力を以て天子に仕える女性像が表現されている。次の王建宮詞（51）と花蕊夫人宮詞（15）には、天子の訪れを期待している女性が描かれている。しかし、片方の女性は受動的、もう一方は能動的のようだ。

王建宮詞（51）

家常愛著舊衣裳	家常（かじょう）　著（き）るを愛（あい）す　旧衣（きゅういしょう）裳
空插紅梳不作妝	空（むな）しく紅梳（こうしゅう）を挿（さ）して粧（よそお）いをなさず
忽地下階裙帶解	忽（たちま）ち　階（きざはし）を下（お）るれば　裙帯解く
非時應得見君王	非時（ひじ）　応（まさ）うに得べし　君王（くんおう）に見（まみ）ゆるを

第一句では、宮廷女性は着慣れた衣服を着るのが好きと述べられている。

第二句では、彼女は化粧無しのまま赤い簪だけを挿す。第三句では、階段を下る時に、はかまの紐が突然ほどけることが描かれている。「裙帶」ははかまの紐。「裙帶解」については、裙帶が自然にほどけると、喜兆があるとされる。権徳輿『玉臺體十二首』（十二首之十一）に「昨夜裙帶解、今朝蟢子飛」（昨夜 裙帶解かれ、今朝 蟢子飛ぶ）『全唐詩』（巻三二八）とある。第四句では、運よく予想外の時に天子に会えるだろうという期待を抱いていることが述べられている。「君王」は天子。王維「奉和聖製上巳於望春亭觀禊飲應制」に「君王來祓禊」（君王は来たりて祓禊す）『全唐詩』（巻一二七）とある。

王建宮詞（51）には、予期せぬ時に天子に会えるかもしれないという期待感がある。第三句の隠喩（「裙帶解」）が好運の出会いの可能性を示唆する。しかしながら、本詞に登場する宮廷女性は基本的に沈んだ気持ちで、第二句に於ける簪の虚しい挿し方と化粧無しの姿はその現れである。第二句の「空」と「不作」の否定的な意味合いを持つ言葉がその雰囲気を強調する。

次の花蕊夫人宮詞（15）では、前半の静かな「掃地」と「焚香」と対照的に、後半では女官が天子を待ちながら知的に鸚鵡に宮詞を歌わせる。

花蕊夫人宮詞（15）

脩儀承寵住龍池	修儀（しゅうぎ）は寵（ちょう）を承（う）け　龍池（りゅうち）に住（じゅう）す
掃地焚香日午時	地（ち）を掃（はら）いて香（こう）を焚（た）く　日午（にちご）の時（とき）
等候大家來院裏	等候（とうこう）す　大家（たいか）の院裏（いんり）に来（きた）りて
看教鸚鵡念宮詞	鸚鵡（おうむ）をして宮詞（きゅうし）を念（とな）えしむるを看（み）るを

花蕊夫人宮詞（15）の第一句では、修儀という女官は天子の寵愛を受けて龍池のほとりに住むことが述べられている。「修儀」は女官の官名。宮嬪の一つ。『隋書』（巻十一）に「淑媛、淑儀、淑容、昭華、昭儀、昭容、修華、修儀、修容、是為九嬪」とある。「龍池」は蜀宮城にある池。蜀宮城の西北に位置している[9)]。第二句では、昼間に土を掃いたり香を焚いたりすることが描写されている。第三句では、修儀が天子の訪れを待っている。「大

家」は宮中の側近が天子を呼ぶ呼称。『旧唐書』（巻一九六上）に「唯願大家萬歲」（唯だ大家の万歳を願うのみ）とある。第四句では、天子を待つ間に修儀が鸚鵡に宮詞の暗唱訓練をしている。

花蕊夫人宮詞（15）の修儀は鸚鵡に宮詞を歌わせることを見てもらうために天子を待っているようだ。その宮詞は宮廷女性が自分自身で作ったものかもしれない。こうして、本詞にうたわれる宮廷女性は機知に富み、知的かつ能動的に時間を過ごしているようである。宮廷女性が自らの想像力と才能で作詩していると考えると、その宮廷女性は、文才のある花蕊夫人自身に近いといえる。結句末の「宮詞」という花蕊夫人が得意とした詩型の明示がその可能性を暗示する。

次の花蕊夫人宮詞（32）は、天子と女性との係わりを表現するが、対等に近い関係のようである。

花蕊夫人宮詞（32）

寒食清明小殿旁	寒食（かんしょく） 清明（せいめい） 小殿（しょうでん）の傍（かたわ）ら
綵樓雙夾鬪鷄坊	綵樓（さいろう） 双（ふた）つながら夾（はさ）む 鬪鷄坊（とうけいぼう）
内人對御分明看	内人（ないじん） 御（てんし）に対（たい）して 分明（ぶんめい）に看（み）る
先睹紅羅十擔牀	先（ま）ず睹（か）く 紅羅十担（こうらじったん）の床（しょう）

第一句では、寒食と清明節の時の小殿の傍らが描かれている。「寒食」は冬至後、百五日にあたる日、あるいは百三日、百六日。火の使用は禁止され、冷たい食事をとる。この時の行事の一つは闘鶏である。「清明」は二十四節季の一つ。春分から十五日目。四月五日、あるいは六日にあたる。第二句では、その小殿の傍らの美しく飾ったうてなに挟まれている闘鶏場が描写されている。第三句では、闘鶏の際、宮女と天子の賭けの際の優勢な鳥の見極めの様子が描かれている。「内人」は宮中に仕える宮人。第四句では、賭けの対象である赤い薄絹で覆われた豪華な寝床が描かれている。「睹」は「賭」として解釈する。底本には、「睹」となっているが、闘鶏に伴う行為と

して、ものをかける（賭）ことがこの宮詞に合うので、他本にある「賭」に改めた。「十擔牀」の「担」（擔）は量詞で重さ百斤。

花蕊夫人宮詞（32）は、頭の切れる宮女の表象と同時に、運だけに左右されず自分で考え動く女性表象でもあるといえそうだ。第三句の「分明看」が自ら考える宮女のありようを顕著に現すようだ。王建宮詞（51）では、運命に身をゆだねるかのような女性像がうたわれているが、花蕊夫人宮詞（32）では、主体的に天子と関わり、競おうとする女性像がうたわれている。花蕊夫人宮詞（16）と同様、花蕊夫人宮詞（32）は前半二句で風景描写（16の池沿いに対して32の闘鶏場で）の後、後半二句で天子との楽しい関わり（詩作の助けに対して闘鶏の賭け事）を描いて、活き活きとした宮女の女性像を描写する。

三・二、「天子の異称」

宮廷女性との重要な係わりを描写する「天子と宮女」の次に、天子を指す様々な名称を明らかにする「天子の異称」というモティーフを通じて、宮女の表象を考察する。最初の異称は「御前」。御前は貴人や主君等の座の前。また間接的に主君を指す言葉。詩に於ける「御前」の例は唐以降である。例えば、張説「奉和聖製初入秦川路寒食應制」に「御前恩賜特風流」（御前の恩賜 特に風流なり）『全唐詩』（巻八六）とある。先ず、王建宮詞（75）を考察するが、『全唐詩』（巻七九八）には花蕊夫人の作品として収録されているので、それを留意する必要がある。

王建宮詞（75）

御前新賜紫羅襦	御前（ごぜん） 新（あら）たに賜（たま）う 紫（むらさき）の羅襦（らじゅ）
步步金堦上軟輿	步步（ほほ） 金階（きんかい） 軟輿（なんよ）を上（のぼ）らしむ
宮局總來為喜樂	宮局（きゅうきょく） 総（すべ）て來（きた）りて 喜楽（きらく）を為（な）す
院中新拝内尚書	院中（いんちゅう） 新（あら）たに拝（さず）かる 内尚書（ないしょうしょ）を

第一句では、天子の座前で紫色の薄絹の短衣を新たに賜ることが述べられている。第二句では、柔らかい椅子付きの、人を乗せる輿が金で飾ったきざはしを一歩一歩上る。第三句では、尚宮局の皆が来て祝賀すると述べられている。「宮局」は尚宮局。後宮の文書等を管理する組織。『北史』（巻十三、489）に「六局管二十四司。一曰尚宮局」（六局は二十四司を管す。一は尚宮局と曰う）とある。第四句では、宮殿では新たに内尚書が授けられたと述べられている。「新拝」は新たに官職を授ける。「内尚書」は後宮の官名である。

王建宮詞（75）に於いては、「御前」は身分の高い方である天子を指す人称代名詞として使用されており、天子の身分への尊敬を込めた間接的な呼称といえる。王建宮詞（75）と同じく、次の花蕊夫人宮詞（17）も「御前」を天子の間接的な呼称として活用するが、宮女との面白い関わりも描写する。

花蕊夫人宮詞（17）

六宮官職總新除	六宮の官職　総て新たに除す
宮女安排入畫圖	宮女の安排　画図に入る
二十四司分六局	二十四司　六局より分つ
御前頻見錯相呼	御前　頻りに見る　相呼の錯すを

第一句では、六宮の官職は全部新たに授けられると述べられている。「六宮」は皇后と五人の夫人が住む六つの宮殿。または、皇后と五人の夫人。盧綸「天長久詞」に「君王初賜六宮衣」（君王 初めて賜う 六宮の衣）『全唐詩』（巻二七八）とある。「除」は（官職を）授ける。第二句では、宮女達は形よく、きちんと並んでおり、まるで絵のようにみえると述べられている。「宮女」は後宮に仕える婦人。「画図」は絵画。第三句では、二十四の役所は六局よりなることが述べられている。「二十四司」は二十四のつかさ。つかさは役所。「六局」は後宮の六局。『北史』（巻十三、489）に「六局管二十四

司」（六局は二十四司を管す）とある。第四句では、（宮女は）天子の前にしばしば間違って呼び合うことが述べられている。

王建宮詞（75）と同じく、「御前」は天子を意味するが、王建宮詞（75）のやや堅く形式的な雰囲気と異なって、花蕊夫人宮詞（17）には宮女達の間違っている呼び合いが可笑しみの雰囲気を付け加えて、本来威厳のある「御前」に一層の親しみを感じさせる。

「天子の異称」である「御前」の次に、天子の座る或いは寝る為の「御床」を取り上げる。「御床」は天子が座ったり横になったりする為の家具である。『旧唐書』（巻五十一、2172）に「帝在房州時…昇御床」（帝は房州に在る時、御床に昇る）とある。先ず、王建宮詞（1）を考察する。

王建「宮詞」（1）

蓬萊正殿壓金鰲	蓬萊(ほうらい)の正殿(せいでん)　金鰲(きんごう)を圧(あっ)す
紅日初生碧海濤	紅日(こうじつ)　初(はじ)めて生(しょう)ず　碧海(へきかい)の濤(なみ)
開着五門遙北望	五門(ごもん)を開着(かいちゃく)して　遥(はる)かに北(きた)を望(のぞ)めば
赭黄新帕御牀高	赭黄(しゃこう)　新帕(しんぱく)　御床(ぎょしょうたか)高し

第一句では、蓬萊宮の正殿は金鰲にのりかかるようにみえる。「蓬萊」は蓬莱宮、含元殿。唐長安の大明宮の主殿。『旧唐書』（巻五、94）には、「改元為咸享元年。三月丁丑、改蓬莱宮為含元殿」（670 年 3 月 14 日に、蓬莱宮を含元殿に改めた）とある。大明宮の中心を為す含元殿は長安城坊の北東にあった広大な宮殿[10)]。また、蓬莱は古代伝説中の神山。『史記』（巻二十八、1369）に「自威、宣、燕昭使人入海求蓬莱、方丈、瀛洲、此三神山者、其傅在渤海中」（威王、宣王、燕昭王の時より、海に入って蓬莱、方丈、瀛洲という三神山を求めるように人を使わした。その三神山は渤海にあった）とある。「金鰲」は、神話中の伝説的な巨大亀。『楚辞』（天問）に「鼇戴山抃、何以安之（鼇(ごう)山を戴せて抃(べん)するに、何を以って之れを安んず）」[11)] とある。

第二句では、太陽が昇ると（その光りに照らされている宮殿のかわらは）

青い海の波のように見える。第三句では、宮殿の五門を開いて遠く北の方を望む。「五門」は大明宮の五門。『唐六典』（巻七）に「大明宮在禁苑之東南…南面五門」とある。第四句では、（五門を開いて北の方を望むと）新しい帷と赤黄色の帝服と高々たる玉座が見える。「赭黄」は帝服の赤黄色。『旧唐書』（巻四十五、天子衣服、1938）に「其常服、赤黄袍衫」（その普段着は赤黄色の袍（長衣）と衫（はだぎ））とある。

王建宮詞（1）の「御牀高」が隠喩として天子の権威と高貴さを象徴して、「赭黄」の赤と黄色が豪華で鮮やかな帝服のイメージを与える。高い御牀を強調する王建宮詞（1）の次に、花蕊夫人宮詞（31）は「御牀」の前の様子を描写する。

花蕊夫人宮詞（31）

月頭支給買花錢	月頭（げっとう）　支給（しきゅう）す　花（はな）を買（か）う銭（ぜに）
滿殿宮人近數千	殿（でん）に満（み）つる宮人（きゅうじん）　数千（すうせん）に近（ちか）し
遇着唱名多不語	唱名（しょうめい）に遇着（ぐうちゃく）すれば　多（おお）くは語（かた）らず
含羞急過御牀前	羞（は）じらいを含（ふく）みて　急（いそ）ぎて御床（ぎょしょう）の前（まえ）を過（す）ぐ

第一句では、月初めに花を買う為のお金を割り当てて与えられることが述べられている。第二句では、女官に溢れる宮殿には、宮女の数は数千人に近い。第三句では、たまたま点呼する時、多くの宮女達はあまり話さない。「唱名」は点呼をとること。第四句では、宮女は恥ずかしい思いで慌てて天子の玉座を通り過ぎる。「御牀」は天子の玉座。『新唐書』（巻三十六、955）に「登太極殿、升御牀、自稱天子」（太極殿に登り、御牀に升り、自ら天子と称す）とある。

花蕊夫人宮詞（31）では、多くの宮女達が花を買う為の金を賜るが、玉座の前を通る時に恥ずかしくて口数が少なくなる、と一定の行事の描写とそれに伴う宮女の心の情景。王建宮詞（75）の天子の前という主に位置的な描写と異なって、花蕊夫人宮詞（17・31）は「御前」の際の宮女の内面的な

感情も現す。特に、花蕊夫人が選定した言葉（17「錯相呼」、31「多不語」・「含羞」）が宮女の素直な気持ちをそのまま描写する。

三・三、「天子の行動」

「天子と宮女」と「天子の異称」の次に、天子の具体的な動きを示す「天子の行動」を通じて、宮女の表象を考察する。先ず、王建宮詞（7）を考察する。

王建宮詞（7）

延英引對碧衣郎	延英（えんえい）　引（まね）きて対（たい）せしむ　碧衣（へきい）の郎（ろう）
江硯宣毫各別牀	江硯（こうけん）　宣毫（せんもう）　各（おのおの）牀（しょう）を別（べつ）にす
天子下簾親考試	天子簾を下（おろ）し　親（みずか）ら考試（こうし）す
宮人手裏過茶湯	宮人（きゅうじん）　手裏（しゅり）　茶湯（ちゃゆ）を過（わた）す

第一句では、延英殿で碧衣の官員が天子に召見されることが描写されている。「延英」は延英殿。長安の大明宮の中央にあって、西側の翰林院と東側の紫宸殿の間にあった[12)]。「引対」は召見する。『旧五代史』（巻三十六、500）に「卻引對朝貢蕃客」（却って朝貢蕃客に引対す）とある。「碧衣」は九品の官員。『資治通鑑』（第二百一）に「九品衣碧」とある。「郎」は男子に対する呼称。第二句では、江西の硯と宣城の毛筆が各机に置いてあると述べられている。第三句では、天子が下ろされている簾の中で試験を監督している。「考試」は試験をする。考査をする。第四句では、宮人は（天子に）お茶を出していると述べられている。「茶湯」は茶水。

王建宮詞（7）の前半では、受験する官員が長安の大明宮に呼び寄せられて天子に対面する。後半では、天子自身が試験を実施する。宮殿に於ける重要な制度の一つを形式的に描きながら、宮女が天子にお茶を出す、という典型的な天子に仕える描写である。

天子の執務に重点を置いた上述した王建宮詞（7）と異なって、次の花蕊

夫人宮詞（7）は天子の執務後の行動に焦点を当てる。

花蕊夫人宮詞（7）

夾城門與内門通	夾城門(きょうじょうもん)は内門(ないもん)と通(つう)ず
朝罷巡遊到苑中	朝罷(ちょうおわ)り巡遊(じゅんゆう)して　苑中(えんちゅう)に到(いた)る
毎日日高祇候處	毎日(まいにち)　日高(ひたか)くして　祇候(ただま)つ処(ところ)
滿隄紅豔立春風	滿堤(まんてい)の紅艶(こうえん)　立春(りっしゅん)の風(かぜ)

第一句では、夾城門と内門は繋がっていると述べられている。「内門」は宮殿の内側の門。その裏に妃等が居る。『新唐書』（巻一八、418）に「妃既出内門」（妃は既に内門を出ず）とある。第二句では、朝の政務が終わってから（天子は）巡り遊んで御苑に行く。「朝」は臣下が君主にまみえる、あるいは天子が政治をとる所。「巡遊」は各地を巡り遊ぶ。李白「永王東巡歌、十一首之五」に「二帝巡遊倶未迴」（二帝の巡遊 倶に未だ迴らず）『全唐詩』（巻一六七）とある。

第三句では、毎日、日が高い時、うやうやしく（天子を）待っている所があると述べられている。「祇候」はただ待つ。第四句では、（その待っている所では）赤く美しい花に溢れている堤は立春の風につつまれている。「紅艶」はあでやかな紅色。赤く美しい花。

花蕊夫人宮詞（7）の前半では、朝廷政務の終了後、天子は御苑に遊びに行く。後半では、天子を待っている美しい妃嬪達を象徴しているかのような「紅艶」が堤に溢れている。上述した王建宮詞（7）の雰囲気と対照的に、花蕊夫人宮詞（7）の描写の焦点は天子と関わりのある宮廷の行事や制度よりも、むしろ公務を離れてからの楽しい時である。その遊びの頻度をはっきり示す言葉が第三句の「毎日」である。

次の王建宮詞（23）と花蕊夫人宮詞（9）は、天子の優しい行為に焦点を当てるが、それぞれの優しさの対象は異なる。先ず、王建宮詞（23）を考察する。

王建「宮詞」(23)

新秋白兎大於拳　　新秋の白兎　拳より大なり
紅耳霜毛趁草眠　　紅耳　霜毛　草に趁いて眠る
天子不教人射殺　　天子　人をして射殺せしめず
玉鞭遮到馬蹄前　　玉鞭　遮り至る　馬蹄の前

第一句では、初秋の白い兎は拳より大きい様子が描かれている。「白兎」は白色の兎。めでたいしるしの瑞物とされていた。『後漢書』(巻一下、62)に「日南徼外蠻夷獻白雉、白兔。」(日南徼外の蠻夷は白雉と白兔を献ず)とある。第二句では、耳は赤く毛は霜のように白く、草に寄り掛かって眠る兎の姿が描写されている。

第三句では、天子は人々に、兎を射り殺すことを禁じる。「射殺」は弓矢で殺すこと。第四句では、天子は玉鞭を馬蹄の前に下げて、兎への害となるような行為をさえぎる。「玉鞭」は精緻で美しい馬の鞭。『旧五代史』(巻六十一　817)に「遼州刺史、賜玉鞭名馬(遼州の刺史、玉鞭と名馬を賜う)」とある。

王建宮詞(23)では、前半二句の小さな可愛い無邪気な兎の描写の後、天子の人間性が突然現れ、側近達が小さな兎を狩らないように鞭を馬脚の前に下げて動きを止める。白兎が瑞物であることは天子の行動に影響したかもしれないが、上下目線の対照性(騎乗の天子から草の上の兎へ)は天子が弱い物を見守る優しい父であるという印象を強調する。表現技法においては、第四句の「玉鞭」を下げる動作は悪業を防ぐと同時に天子の正義感を示す。兎を対象に優しさを示す王建宮詞(23)と対照的に、次の花蕊夫人宮詞(9)は宮女を対象にその気持ちを表す。

花蕊夫人宮詞(9)

立春日進内園花　　立春の日　内園の花を進る
紅蕊輕輕嫩淺霞　　紅蕊　軽軽として嫩らかく浅霞のごとし

跪到玉階猶帯露　　跪(ひざまず)いて玉階(ぎょっかい)に到(いた)れば　猶(な)お露(つゆ)を帯(お)び
一時宣賜與宮娃　　一時(いちじ)　宮娃(きゅうが)に宣賜(せんし)す

第一句では、立春の日に宮中の御苑の花をささげると述べられている。第二句では、赤い花のシベは軽やかで、柔らかくて薄い朝焼けのようだと描写されている。「紅蕊」は赤い花のシベ。武甄「奉和立春内出綵花樹應制」に「紅蕊先從殿裡開」（紅蕊は先ず殿里より開く）『全唐詩』（巻一〇二）とある。第三句では、美しい階段の前に跪く時、（花は）まだ露を帯びている。「跪」は敬意を表す為のひざまずきなので、花は天子に献上されていると思われる。第四句では、その時、天子が（新鮮な花を）美しい宮女に贈ると述べられている。「宣賜」は天子の詔勅を伝える公文書である勅宣によって賜ること。王建「和蔣學士新授章服」に「看宣賜處驚回眼」（宣賜の所を看て驚きて回眼す）『全唐詩』（巻三〇〇）とある。「宮娃」は美人の宮女。韓偓「宮柳」に「宮娃猶似妬蛾眉」（宮娃猶お蛾眉を妬むに似たり）『全唐詩』（巻六八〇）とある。

花蕊夫人宮詞（9）では、天子に献上された花々が一転して天子から宮女に与えられていて、天子の優しさを物語る。花蕊夫人宮詞（7）と同じく、花蕊夫人宮詞（9）も政務を離れた天子の楽しい余暇の姿を焦点に当てる作品である。

おわりに

しばしば女性と結びつけられる「花」、女性とはやや縁遠い存在である「馬」、宮廷の中心となる「天子」という三つのモティーフとの係わりにおいて、王建「宮詞」と花蕊夫人「宮詞」を比較・考察した結果、花蕊夫人「宮詞」における宮廷女性のイメージには次のような特徴が見られることが明らかとなった。

宮廷女性と「花」では、宮廷女性は楽しみ・喜びを能動的に享受する存在

として表現されている。採蓮と蓮の花との踊りなどの際に現れる表象である。更に、花蕊夫人宮詞（28）は、「少年」への変装によって一層工夫された遊び心を示す。こうした描写は王建「宮詞」にある盛りを過ぎた花に代表される受動的かつ「失恩」の女性表象と対照的である。

宮廷女性と「馬」では、宮廷女性はより女性らしく表現されている。その表象は女性のしなやかな容姿と可愛いらしさに焦点をあてる。これは王建「宮詞」が描写する男性的な女性の表象と異なる。花蕊夫人は、王建の男性中心主義的な視点を離れて、女性の内面に踏み込みながら宮廷女性の心身に対して女性らしい描写をしている。

「天子と宮女」では、花蕊夫人宮詞に於いて、宮女は積極的・自発的に振る舞う存在として表現されている。これは、天子の詩作の助けをしたり、鸚鵡に宮詞を歌わせたり、闘鶏の際に天子と勝負あてをしたりする描写に表現されている。王建「宮詞」に表現されている受け身で寵愛や運に頼る女性表象と異なる。

「天子の異称」では、王建宮詞（75）の「御前」は身分の高い天子を指す人称代名詞として使用されている。同詞の比較的形式的な雰囲気と異なって、花蕊夫人宮詞（17）には、天子の前の宮女達の間違っている呼び合いが可笑しみの雰囲気を付け加え、花蕊夫人宮詞（31）は、多くの宮女達が玉座の前に恥ずかしくて口数が少なくなる。このように、花蕊夫人宮詞の描写には、天子の様子だけでなく、それに伴う宮女の心の情景も追加される。

「天子の行動」では、王建宮詞（7）は天子の執務に重点を置くが、花蕊夫人宮詞（7）は天子の執務後の妃嬪達に溢れる堤への巡遊に焦点を当てる。王建宮詞（23）は天子の小さい兎への優しさを通じて正義感のある行為を表現するが、花蕊夫人宮詞（9）は贈花を通じて宮女への優しい気持ちを現す。

このように、「花」に於ける花蕊夫人宮詞のより明るく自由な女性像、「馬」に於けるより女性らしい姿、「天子と宮女」に於けるより積極的・自発的な宮女表象の他、「天子の異称」・「天子の行動」においては、王建宮詞における典型的な威厳のある天子像と異なるイメージがある。つまり、花蕊夫人宮

詞は、天子の政務と象徴的な様子の範囲を超え、宮廷女性との関わりのある描写を追加することによって、宮女と天子との距離感を縮めて、天子・宮女ともにより自由かつ親近感のある宮廷人物像として描いた。特に、宮廷女性の表象に関しては、花蕊夫人「宮詞」に於けるより積極的な女性像が宮廷女性の声と姿を一層鮮やかにし、より豊かなものにしたといえる。

今後の研究では、他のモティーフに於ける王建宮詞・花蕊夫人宮詞の考察を通じて、花蕊夫人宮詞の独自性を一層明らかにする余地がある。

［注］

1） 花蕊夫人の号を有する女性は二人だった。一人は五代前蜀（907-925）の高祖王建の妃徐氏（883?-926）、もう一人は後蜀（934-965）の後主孟昶の妃徐氏（一説に費氏；生没年不詳）『世界文学大事典』（集英社、一九九七年）。
2） 宋陳師道撰『後山居士詩話』（藝文印書館、一九六五年）。
3） 王建の底本として、明毛晋編『三家宮詞』（上海：商務印書館、一九三六年）を、花蕊夫人の底本として、宋僧文瑩撰『湘山野録・續録』（藝文印書館、一九六五年）を使用した。
4） 孟元老撰・鄧之誠注『東京夢華録注』（巻七）（商務印書館、一九五九年、204頁）。
5） 徐式文箋注『花蕊宮詞箋注』（巴蜀書社、一九九二年、61-62頁）。
6） 曹明綱撰『満堤紅艶立春風：花蕊夫人詩注評』上海古籍出版社、二〇〇四年、12-13頁）。
7） 蘇泓月著『宣華録：花蕊夫人宮詞中的晩唐五代』北京連合出版公司、二〇一八年、313-316頁）。
8） 王建著・王宗堂校注『王建詩集校注』中州古籍出版社、二〇〇六年、620-621頁）。
9） 王文才著『成都城坊考』（巴蜀書社、一九八六年）を参照。
10） 『大唐の繁栄』（『世界歴史シリーズ』第7巻、148頁、世界文化社、一九六八年）。
11） 小南一郎訳注『楚辞』（岩波書店、二〇二一年、208頁）。
12） 清徐松撰、李健超増訂『最新増訂唐両京城坊考』（西安：三秦出版社、二〇一九年）。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Palace Women Imagery in Lady Huarui's Palace Poems

Guy Hobbs

Palace Poems (*Gongci*) depicting court life began in the Middle Tang with Wang Jian (?-830?), who wrote one hundred *Gongci*, followed by the poetry of Lady Huarui of the Five Dynasties Shu Kingdom (907-965). Chen Shidao (1053-1101) of the Northern Song stated, "Emulating Wang Jian, Lady Huarui composed one hundred Gongci." What was the extent of this influence, and what characteristics do Lady Huarui's Palace Poems exhibit? By comparing the *Gongci* of Wang Jian and Lady Huarui and highlighting respective differences through flower, horse, and emperor motifs, this article aims to shed light on Lady Huarui's representation of court women, residing deep in the palace and serving the emperor.